

終末期の方墳について

— 鶴ヶ丘古墳群をめぐって —

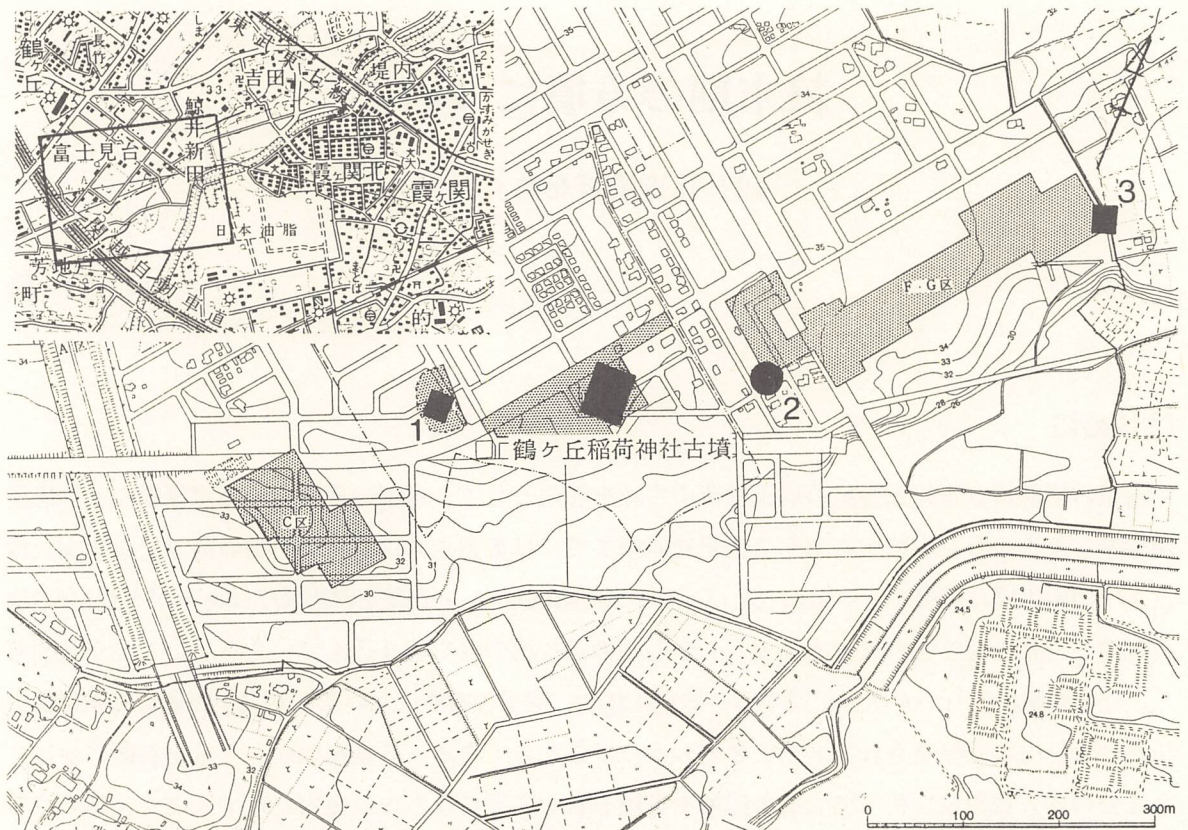
小久保 徹

はじめに

埼玉古墳群は5世紀末築造の埼玉稲荷山古墳を初現として、通例の埴輪を持たず特異な「須恵質埴輪壺」を出土した中の山古墳が7世紀初頭頃までには築造され、前方後円墳の終末になる(1)。最近、中の山古墳に隣接する戸場口(とばくち)山古墳がトレンチ調査の結果ではあるが1辺44mの墳丘規模と二重の堀をもつ大型方墳で、しかも中の山古墳の堀を切り込んでいるらしいことが判明した。伴出遺物に乏しいが7世紀前半頃と推定され(2)、埼玉古墳群においても前方後円墳の終末以後、新たに大形方墳が築造されていたことがわかってきたのである。6世紀末から7世紀初頭にかけて今までの前方後円墳に代って大型の円墳や方墳を営むようになるのは畿内だけではなく、関東でも同じような展開を示すことが知られている(3)。県内では7世紀の方墳は10数基あるが、同時代の古墳のほとんどすべてが小型円墳で占められるなかでの数量的な稀少性は特徴的存在といえる。ここでは筆者らが1976年に報告した鶴ヶ丘古墳群(4)をとりあげ、特異な石室基礎地業をもつ方墳について再検討したいと思う。その後隣接地で同等の遺構をもち、全体像がつかめる方墳が調査され、地域例ではあるが終末期の方墳の具体的な姿がかなり明らかになったと思うからである。鶴ヶ丘古墳群の終末期の方墳の特徴を検討することは、県内における終末期の方墳の実態が不明ななかにおいて十分意義のあることと考える。

鶴ヶ丘古墳群の概要(第1図)

鶴ヶ丘古墳群は川越市街の北東に当たる鯨井新田及び鶴ヶ島市鶴ヶ丘に位置する。南側に小畦川(入間川の支流)を臨む洪積台地の南縁に立地している。大規模団地造成に伴う数次にわたる調査で4基の古墳が発見された。1号墳(方墳)とその南西150mにある鶴ヶ丘稲荷神社古墳(方墳)は全体が調査された(5)(後述)。2号墳(F区4号址)は堀の一部が検出され、円弧状況から径30m程度の円墳になる。隣接地で大量の石の発見が伝えられていることから河原石使用の横穴式石室があったと思われる。3号墳(G区13号址)は長さ20m、最大幅2.4mの舟底形の堀が1ヶ所単独で発見された。調査区外にはかつて塚があり、緑泥片岩の破片が発見されたという。1号墳の堀と形状や覆土状況が全く同じなので同規模の方墳の西側堀に当たるとと思われる。現況の古墳分布地域は、沖積地側にやや張り出した台地で眺望性のよい地域を占めている。地形や古墳分布状況から全体は4基プラス1～2基程度の古墳群であろうと思われる。埴輪や6世紀代の土器等は発見されていないので、7世紀代の数基の古墳からなり、その終末に方墳が築かれる古墳群の一例としてよいであろう。



第1図 鶴ヶ丘古墳群分布図（註5文献より 一部改変）

鶴ヶ丘1号墳の概要（第2図下左）（第3図下）

墳丘はほとんど削平され、河原石積横穴式石室の側壁の一部とそれを直接背後で支える後ごめ粘土、および礫床の一部が検出された。残存状況から石室の規模、主軸が推定できる。石室下から黒色土（旧地表土）を掘り込んだ大きな土壙が検出された。短辺（東-西）3.4m、長辺（南-北）5.9mの長方形プランで各辺は東西南北の方位にほぼ一致する。深さは旧地表面（石室床面と同高）から90cmあり底面は平坦である。表土をローム層面まで掘り込み、この面のやや内側から再度、ほぼまっすぐに掘り込んでいる。内部は底面から版築土で充填され、いわば「掘り込み版築地業（形）」を施している（通例の地業としての石室掘り形（方）と区別するための名称とする。四辺を掘り込み、厚い版築土層を特徴とするもので掘り込み地業に版築の名称を加え、石室構築に限定した基礎地業の名称とする）。中位以上が特に丁寧であった。黒色土主体の柔らかい、2～3cm程の極端に薄い間層を挟み、10～15cm厚の版築土が積まれ、これが3工程ほど繰り返され、石室床直下部はやや厚い版築土になっている。中位以下は1工程が厚くなる。版築土はハードロームブロック土及びさらに堅いブラックバンド層のブロック土をまじえている。掘り込み部の主軸はほぼ南北方位に等しいが、後から造られる石室の主軸（推定）は掘り込み部の主軸と平行せずやや西偏している。また掘り込み部の範囲は石室全体と前庭部の一部まで含むかなり大きなものであった。遺物については弓の金具と思われる棒状の金具1点が石室内から発見されたのみである。

石室を囲むように東・西・北の三方に直線状、断続的に「コの字」状の堀が巡る。内側現況は東西25m、南北28mである。石室の奥壁中央と推定される点を中心とした場合、ほぼ等距離に堀の位置

が収まる。底面は舟底形で平坦ではなく、深さも一定せず、整形の意図は認められない。最深部はローム面下90cmある。確認面の最大幅は4.8mである。旧地表レベルが分かっているので、当時の地表でも確認面と大差ない不整プランが想定できる。北と東の堀は石室主軸と直交・平行し、西の堀は掘り込み部主軸と平行する。この意味は不明だが、方形区画にしようとする強い指向と、一定の設計に基づいた計画的な作業が推定される。石室から堀部分まではかなり離れている。同規模程度の石室を持つ7世紀代の古墳の石室と堀までの距離と比較すると1.5ないし2倍くらいの距離になる。なお堀内からの遺物は全くなかった。

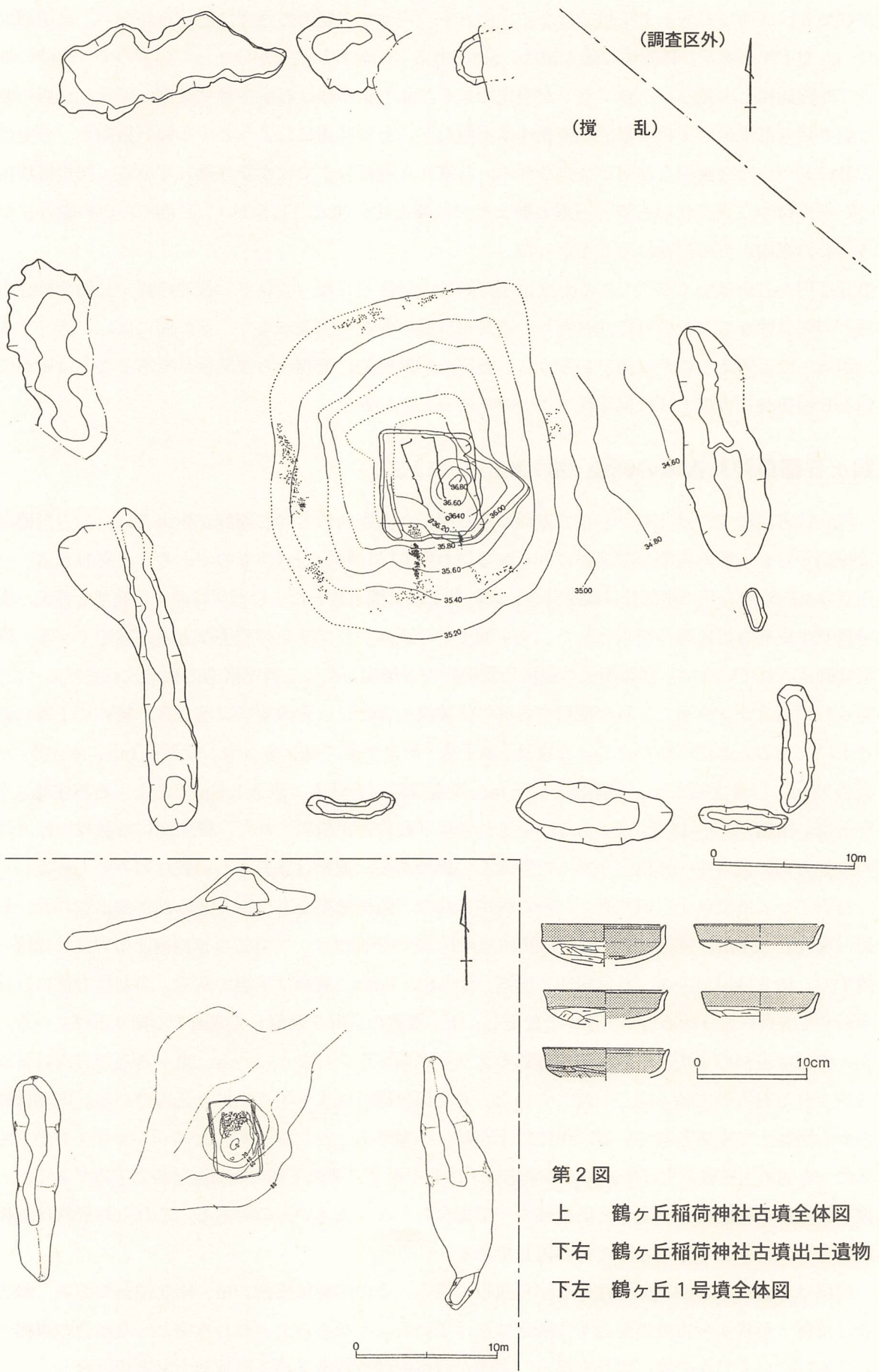
墳丘は円か方かは全く不明であるが堀は明らかに方形区画になっている。後述の鶴ヶ丘稲荷神社古墳との類似性から方丘の可能性があり、墳丘裾は堀のかなり内側になり、その間には広いテラス部分があったと考えるのが妥当であろう。石室の形態構造、遺物から後期後半であることは確かだ。鶴ヶ丘稲荷神社古墳とほぼ同年代でよいであろうと思われる。

鶴ヶ丘稲荷神社古墳の概要（第2図上）（第3図上）

墳丘は方墳形で、ほぼ等レベルで方形に巡る礫群と石室前にも同じ礫群が検出された。方形礫群は後期から終末期の古墳の墳丘裾にみられるいわゆる「外護列石」状のものであろうと思われる。一辺2.0m内外の方丘の裾部分に礫を葺き、両側壁下部に礫を葺いた、台形状に開く前庭部を備え、玄室奥壁中央部を対角線の交点とした、文字通りの「正方形」プランの整美な方墳が推定できる。段築は確認されていない。埋葬施設は凝灰岩質砂岩の大形切石による複室構造の横穴式石室であった。整った平面プランを示し、石の配列や各部の位置決めなどに一定の規格に基づき、極めて丁寧に造り上げていることがうかがえる。玄室は「羽子板」形の平面プランをもつ。全長6.1m、玄（奥）室長2.58m、同最大幅2.4m、前室長1.95m、羨道は河原石積みで長さ1.6mである。石室主軸（玄室前室の主軸）はN-15度-Wである。いずれも最下段のみが検出された。礫床面には数枚の緑泥片岩を長方形に敷き並べた棺座があったが珍しい例である。遺物は鉄釘らしい鉄片のみであった。

石室下からは黒色土（旧地表土）から掘削された、版築地業をもつ掘り込み部が検出された。短辺（東-西）6.6m、長辺（南-北）7.9mの方形に近い平面プランで各辺は東西南北の方位にほぼ一致する。深さは旧地表面（石室床面と同高）から81~92cmで底面は平坦である。当初は方位にほぼ合わせて方形に掘り始めたが、途中で変更し、東・西辺の方向を西偏して底面まで掘り下げている。北・南辺は当初のままなので平行四辺形のような平面プランになっている。東・西辺の方向は後から造られる石室の主軸方向と一致していた。変更部分以外はまっすぐに掘り込んでいる。内部は底面から版築土で充填されている。中位以上が特に丁寧であった。ローム土、ロームブロック土を主体につき固め土を積み上げている。石室床直下はやや厚く、その下部の版築土は特に丁寧であった。掘り込み部の範囲は石室全体と前庭部の一部を含むかなり大きいものである。これらの形状は規模は異なるが鶴ヶ丘1号墳とほとんど同じである。

周堀は各辺内にも断続部を作りながら四辺に巡る。その内側は東西40m、南北53mである。報告者は位置と形状から古墳の堀とする断定は避けているようであるが、むしろ堀とした場合の根拠としてあげたいいくつかの点（墳丘を巡る、方向が石室主軸や石室下の基礎地業土壌の辺と合う、出土

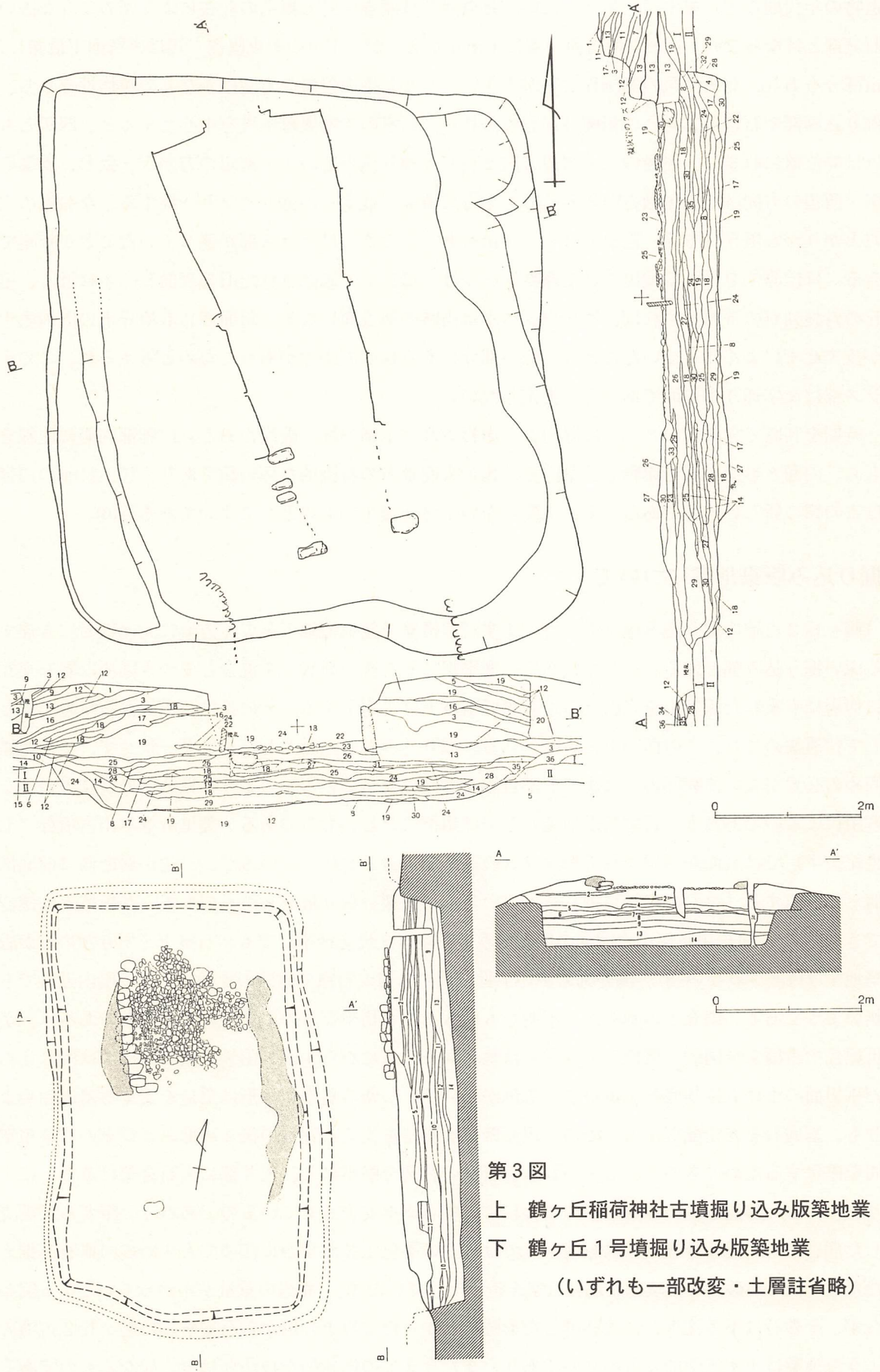


第2図

上 鶴ヶ丘稲荷神社古墳全体図

下右 鶴ヶ丘稲荷神社古墳出土遺物

下左 鶴ヶ丘1号墳全体図



第3図

上 鶴ヶ丘稲荷神社古墳掘り込み版築地業

下 鶴ヶ丘1号墳掘り込み版築地業

(いずれも一部改変・土層註省略)

遺物の年代観など)をすべて是としたい。北東隅部は調査区外と攪乱の存在により図のような広い断続部とはならない。ローム面は西→東に1m差があるが、下位の南東隅側二辺は確認面下最深1.7m部分もあり、北・西辺の30cm程と差が大きい。しかし平面位置や方向はかなりの規格性をもち、掘り込み部や石室の方向との相関性が認められる。石室の玄室奥壁中央を中心とすると、四辺ともほぼ等位置に収まり、周堀の北・南辺方向と石室下掘り込み部の北・南辺の方向が一致し、周堀の東・西辺の方向は石室主軸方向と同じで、正方形墳丘(推定)の裾ラインと一致する。なお堀の立ち上がりから墳丘(方丘)裾までは9~15mもある。ここにはテラス部が巡っていたことが推定できる。ほぼ等位を保って検出された礫群レベルは、墳丘下で確認された旧地表面レベルに近く、墳丘の外護列石の下面とすれば、墳丘裾レベルは当時の地表面になる。斜面側にも墳丘下の旧地表土が流失せずによく残っていたことは、低い部分にある程度の盛土があったためと考えられ、このテラス部は文字通り平坦面であったと推定したい。

時期を判断できるものとしては堀内から赤彩された土師器坏の破片がある。口唇部内側に沈線をもち、内面と外面上部を赤彩し、県内では比企入間地方の特徴的な坏の類であり、10~11cmの口径はこの類の新しい形態である。末には降らない7世紀後半のものとしてよいであろう(6)。

掘り込み版築地業について

鶴ヶ丘2古墳の掘り込み版築地業は、まず石室構築予定地の地下を広く方形に90cmほどにも達する深い掘り込み部を作る。そして底面を一度平坦にした後、異質土を混合してつき固めた層を交互に何層にも重ねた版築土を底面から地表まで積み上げて完了する。その後に石室等が新規の工程として位置決めされ、この面の上に構築される。掘り込み部の主軸と石室主軸が一致せず、また基礎固めの必要がない前庭部の一部までも不自然な方向で乗っているかのように見えるのはこのような理由によるのであろう。石室基礎地業としては類例に乏しいものである。美里町塚本山古墳群(7世紀後半)では底面が平坦な長方形プランの掘り形(方)を作っているが、一辺が斜面側(前庭部側)に開口する「コ」の字状に掘り込んでいる。やや深い掘り形をもつものもあるが版築土は確認できない(7)。東松山市桜山古墳群の切石積みの石室(7世紀後半)でも、石室下を掘り窪めるが版築地業は確認されない(8)。調査例の多い7世紀代の古墳の石室で同等の地業施工例は県内近県でも無いようである。調査上の制約から不明なものもあるが稀少なものであることは確かであろう。7世紀代の古墳を全国的に概観しても多くは地表面を平らにならすか、山地丘陵にあつては削り込んだ平坦面の上に直接基底石を置いている例が多い。いわゆる石室掘り形は重量を支える基礎固めよりも、基底石を安定配置するための平坦面確保と石室を支える背後の後ごめ部およびその作業用空間を確保するためのものであると思われる。石室の背後を堅牢にし、天井部に大石を架けることにより、全体が一体化しその均衡を保つことによって石室を安定させているのであろう。筆者らが調査した熊谷市三ヶ尻4号墳(6世紀後半)では地表の黒色土をわずかに窪めて大きめの河原石を据えただけで後ごめ砂利を充填しながら石室を造り上げていた(9)。相当の重量がかかっていたにも関わらず、その石は不等沈下、二次移動した形跡は無かった。以上の例から石室構築に鶴ヶ丘2古墳のような地業は土木工学的にも不必要であり、また今までの伝統的な技法とは全く異なるものである

ことが知られる。このような地業は古代寺院建築における塔・金堂の基壇を築く際に地面を深く掘り込下げ、その底から丁寧な版築を施す掘り込み基壇の技法(10)と同一である。日本へは寺院建築にともなって伝来したもので、最初の本格的な寺院である飛鳥寺の造営が開始された崇峻元年(588)以後行われた技法である。鶴ヶ丘の2古墳より時代はやや下がるが各地の国分寺の塔や金堂、講堂の基礎地業として広く採用されている(11)。これらのなかで版築土中にしばしば認められる黒色土層は鶴ヶ丘1号墳にもあったつき固めに不向きな黒色土の間層を挟むむことと類似している。理由は不明であるが版築の特徴として技法の系譜を同じくするものと想定したい。

古代瓦の研究の進展により県内にも、鶴ヶ丘古墳群が形成された7世紀代の寺院があることがわかってきた(12)。飛鳥寺様式の瓦が採集された比企郡滑川町寺谷廃寺が7世紀前半と考えられており、関東最古の寺院といわれているが寺院遺構は不明である。そのほかいくつかの廃寺があるが、同じ入間郡域にあり、鶴ヶ丘古墳群の北方5 kmにある坂戸市勝呂廃寺が最も関係が深いと思われる。酒井清治氏によれば創建は7世紀第4四半期で瓦は隣郡にある南比企窯跡群産のものであるという。そして遺物量、遺構規模から武蔵国最大の寺院が予想され有力氏族(物部直の氏姓をもつ)の建立とし、氏寺から郡寺に発展したものとした。さらに郡家として7世紀末から8世紀初頭の畿内系土師器、東海や末野産、上野系須恵器、南比企窯跡群産の須恵器を出土する川越市霞ヶ関遺跡(鶴ヶ丘古墳群の東南3 kmにある)を比定し、勝呂廃寺と密接に関連するとした(13)。このような地理的歴史的環境は鶴ヶ丘古墳群の時代と重なる創建時に、当地域に寺院建築に付随してもたらされた各種の技術や技能(瓦・須恵器・金属生産、石工・木工・土木技術など)を郡領域を超えて集積駆使でき得る有力氏族集団の存在が想定できる。鶴ヶ丘2古墳に寺院建築技法に由来する掘り込み版築地業が採用されたのはこのような背景に基づくものであろう。

むすびにかえて

特異な石室基礎地業を共通とする点において墳丘形態の不明な1号墳は鶴ヶ丘稲荷神社古墳と同じ方丘の可能性がある。規模は異なるが鶴ヶ丘1号墳と鶴ヶ丘稲荷神社古墳は同一企画設計に基づいて、同一技術者集団により築造されたと考えられる。両古墳の特色をまとめると次のようになる。第一に方格を強く意識した企画設計の存在が想定できる。堀の位置とその方向、墳丘ラインの形態と方向、石室の位置と主軸、石室下の掘り込み部の位置と方向は相互に関係し、平行あるいは直交関係にある。石室は堀で囲まれた方形区画の中央に位置し。玄室奥壁の中央部を点あるいはそこを通る線を基準とした場合、古墳を構成する各部位との距離やバランスがかなり良い。稲荷神社古墳の堀が不整ではない平行四辺形になっているのは何らかの一定の企画に基づいていることが想定できる。第2に方位を意識した企画設計が想定できる。石室下掘り込み部の四辺は東西南北に向いている。その後に構築される石室方向は掘り込み部主軸と異なり、全く異なる手続きを経て決定するのであろうが、古墳造営において東西南北を意識した設計に基づいて最初の作業が開始されるのであろう。第3に墳丘裾の四周を巡る周堀部との間の広いテラス部の存在があげられる。石室の前庭部と同じ平面空間で「周庭部」ともいうべきテラス部である。稲荷神社古墳は墳丘の裾位置がわかるが、墳丘辺をほぼ2倍にした方形範囲の内側が周庭部に相当し、その外側に堀が巡っている。

1号墳も遺構の規模から判断して同程度の比率の周庭部が推定できる。通例の7世紀代の古墳については裾の確認が難しいが、残存墳丘裾と周堀との距離がこれほどの比率になるのは特異であり、特色の一つとしてあげられる。第4に断続して巡る、不整な堀の存在があげられる。7世紀の古墳堀がかなり不整になるのは通例であり、形式的な境界表示の機能を果たすと思われるが、方向と石室からの距離はほぼ同じで、一定の規格の存在が想定できる。これは重視さるべきは内側の周庭部分で、何らかの重要な機能を果たす方形の空間として意識されたためと思われる。

以上の諸特徴は古墳築造に当たって、両古墳ともにその規格に方格や方位が意識され、石室だけでなく墳丘、堀の位置など仕上がりの全体像がしっかりと把握された設計図に基づいて造り上げられてゆく過程が想定できる。古墳築造において従来の群集墳とは異なる新しい要素といえる。

鶴ヶ丘稲荷神社古墳は整った20m程度の正方形の墳丘部を持つが、堀の内側にあたる方形テラス部は50m近く、ここを墓域に含めるとかなりの大規模墳となる。7世紀の入間郡域で活躍し、相当の勢力をもつ有力氏族が築造した最後の古墳として位置づけることができよう。

小型方墳は千葉県房総地域にかなり多く分布し、7世紀後半の特色ともなっている(14)。数基単位の古墳群や南北方位に合わせて造られるなど(15)鶴ヶ丘古墳群例と同じようなものもあるが、群集墳分布を示すものなどもあり多様である。県内の方墳はこのような状況はないが古墳の終末が単純ではないことを示している。今後古墳の終末に深く関わる方墳秩序ともいべき実相を解明してゆくためには、埋葬施設や古墳規模、古墳群での位置づけなど、個々の方墳がもつ諸要素の実態分析の積み重ねが必要であろう。

註

- (1) 若松良一ほか 1989『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第7集 埼玉県教育委員会
- (2) 県立さきたま資料館 1994「県内主要古墳の調査(Ⅲ)―戸場口山古墳・中の山古墳範囲確認調査―」『調査研究報告』第7号 埼玉県立さきたま資料館
- (3) 白石太郎 1989「古墳の終末」『古代を考える 古墳』吉川弘文館
- (4) 谷井彪、小久保徹 1976『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会 なおp54の19行以下の土層説明に校正ミスがある。以下のように訂正したい。7層→8層、8層→2層、10層→4層、13層→7層
- (5) 岩瀬譲ほか 1985『鶴ヶ丘(E区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第45集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (6) 富田和夫 1992『稲荷前遺跡(A区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第120集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (7) 増田逸朗、小久保徹 1977『塚本山古墳群』埼玉遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
- (8) 小久保徹ほか 1981『桜山古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (9) 鈴木嘉吉 1974「寺院―伽藍の構成と配置―」『古代史発掘9 埋もれた宮殿と寺』講談社
- (10) 斎藤忠 1996「国分寺跡の規模と建物」角田文衛編『新修国分寺の研究』第六巻 吉川弘文館
- (11) 高橋一夫ほか 1982『埼玉県古代寺院調査報告書』 埼玉県史編さん室
- (12) 酒井清治 1987「窯・郡司・郡司―勝呂廃寺の歴史的背景の検討―」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会
- (13) 千葉県文化財センター 1992「第7章第2節終末期古墳」『房総考古学ライブラリー6 古墳時代(2)』千葉県文化財センター
- (14) 杉山晋作 1982「古墳群形成に見る東国の地方組織と構成集団の一例―公津原古墳群とその近隣―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集